

発達障害学生における 学生ピアサポーターによる支援実践 —発達障害理解とマッチングの問題について—

企画者	横田晋務（九州大学）
司会者	田中真理（九州大学）
話題提供者	吉田ゆり（長崎大学） 岡田菜穂子（山口大学）
指定討論者	池田忠義（東北大学）

KEY WORDS: 発達障害 ピアサポーター 障害理解

【企画趣旨】発達障害学生は、その障害特性が周囲から見えにくく、支援の必要性が理解されづらいことや(横田ら, 2020)、社会性の障害により、学生間の自然なサポート(ナチュラルサポート)を受けにくさなどによる、修学に困難さを抱えている(高橋, 2012)。これまでのシンポジウム(横田ら, 2020)では、発達障害学生支援を担う人材として、ピアサポーター(PS)学生に焦点を当て、大学における支援実践報告から、以下の2点が課題として明らかにされた。すなわち、(1)発達障害特性の理解のしづらさや関係構築の難しさから、支援にあたる PS 学生に生じる戸惑いや怒り、不安全感などのネガティブな感情への指導・支援体制の構築、(2)支援対象学生と PS 学生の専門性のマッチングである。以上より、本シンポジウムでは、上記2点の課題について、各大学での支援実践から検討を行うことを目的とする。

【話題提供者の趣旨】●長崎大学における実践報告(吉田): 長崎大学の学生ピアサポーターは“アクセスサポーター(以下、AS)”と呼ばれ、直接的な支援、間接的な支援、研修の3つの活動を行う。発達障害への直接的支援は、スケジュール管理支援や移動支援が主である。本稿は AS とナチュラルサポーター(以下、NS)を対象に、発達障害理解とマッチングを検討の変数の一部として行った面接調査(吉田他, 2021)をもとに報告する。

発達障害理解について、障害に関する専門的知識を有すると考えられる AS は、例えば ASD 学生と話題が続かず関係が築けない、カトニア様の症状に戸惑うなどの悩みもあるが、それにより支援動機は下がらず、むしろ今後に向けていい勉強になったなど、活動をポジティブに意味づけた。ADHD（不注意型）学生が対象の場合、例えば課題を出したと聞いたが実は出していなかったなどが続き、「わかっていても」強い不信感を抱き関係が悪化することが頻々と見られた。特に信頼関係が築けたと考えていた AS ほど、ショックも大きかった。また連絡が取れなくなるとサポーターの職務が遂行できないことへの焦りが生じていた。一方、研修は受けていても専門的知識が十分ではない AS は、対象学生のできない理由が受け入れられず支援が進まないことが大きな負担になっており、スタッフのスーパーバイズが必須であった。専門性とのマッチングについては、より属性が近く専門が一致している方が支援効果が高く、AS がゼミの先輩の例では実習日誌の作成や指導案のコツなどの共有がしやすく有効であったが、ナチュラルサポートに非常に近い支援といえた。一方で専攻・学部が異なると、背景が共有されず支援が表層的になる傾向がみられた。

以上を踏まえ、AS に不可欠な知識と、活動を支える体制とは何か、また属性や専門性が近い NS を増やすことの

具体的な方法について議論を深めたい。

●山口大学における実践報告(岡田): 山口大学では、「学生特別支援室(SSR)」にて、障害等のある学生に対し、授業中支援や修学支援環境整備等を行う支援学生スタッフの育成・派遣を行っている。発達障害等のある学生の中には、情報処理が苦手で複数の作業を同時に実施することが難しかったり、対人緊張が高く自ら同級生や担当教員等に話しかけにくい学生も多い。そこで、学生特別支援室では、授業でのコミュニケーションを適宜補助する「コミュニケーションサポーター(以下、CS)」の仕組みを整備している。

実験等の作業を伴う授業に派遣する場合、CS は、当該学生の手が止まっていたら適宜学生に声をかけて進捗状況を確認したり、必要に応じて授業担当教員や TA 等に作業の進捗を確認してもらい適宜当該学生への助言を求めるといった役割を担う。CS は、授業内容に関する専門性は低い、ある程度当該学生の状況を把握し、授業内のコミュニケーションを促す、いわば学生と教員との仲介役である。

CS は、あくまでコミュニケーションの補助が目的であるため、負担や責任が過多とならない様、運用を工夫する必要がある。また CS に限らず、学生スタッフには自分の支援は充分かといった不安や、支援対象となる学生との相性等がついて回る。学生特別支援室では、サポーターの配置に際して、学生スタッフのマッチングを行い、サポート要領を作成して共有するとともに、支援後のフォローを行うこととしている。また、利用学生や授業担当教員にも事前にサポーターの役割を共有し、授業の進捗に合わせて支援状況を確認し適宜調整していくことが重要である。授業中支援については、TA や SA に協力を求められる場合も多く、CS の配置に至らないケースもある。CS は実績は少ないものの実験科目等で実施されており、今後グループワークやペアワーク等でのニーズも生じることが予想される。

【指定討論者の趣旨】発達障害学生の場合、発達障害を背景として、抑うつや不安といった問題を併せ持つケースも多く、診断的な理解のみならず本人の困りごとにフォーカスした対応が求められる。このようなケースについては、PS 学生における障害特性の理解の醸成や PS 学生へのサポート体制の構築に関して検討することが重要であろう。また、マッチングについては、障害の専門的知識や学術的背景といった PS 学生側の要因のみならず、対象学生側の困り感の醸成や支援を受けることへの認識といった準備性も大きな要因となると考えられるため、双方に視点を置いたマッチングの考え方について議論したい。

(YOKOTA Susumu, TANAKA Mari, YOSHIDA Yuri, OKADA Nahoko, IKEDA Tadayoshi)